

證の佛教

梅村舜道

佛教は一口に八万四千の法門と申しますが、實際雜多な教理を包藏して居りまして、大小と謂ひ顯密と謂ひ聖淨等と分かれ、到底一概に論ずることは出來ず、同一佛の所説とは信せられぬ程内包に異りがあるやうであります。此を大體に於て右來の祖師方は、釋迦一佛が衆生を引導して淺より深きに向はしめ、又時と機とを考へて各々利益を與へられたるものであると御考になり、近來史的又は科學的研究と云ふことが佛教界にも盛に論せられてより、是は唯根本から教理は發展するものであると云ふ考へから、此を長き年月の上に教理發展と云ふ範疇に當て拵めて考へやうとするのであります。無論釋尊御在世八十年御說法の時四十有餘年でありまして、爾の後此を繼承せる佛教徒が、時に依り、處に依り、人に依りて種々に考察せられ表明せられたることは諍はれないのである。吾人は未だ羅漢の悟りをも得ぬ身を以て、佛陀の内證如何を云爲せむことは甚だ誤りであることを知るものであるが、吾人は凡ての經典に對する時、此は佛説であると信ずる時、強き力を得ることは今尙事實である。

釋迦佛の夢にも知らせ玉はざりし事が後世の佛教徒に依りて案出せられたのだとして、且らく教理發展と云ふ一の範疇に(而も此れ獨斷的、豫想的、假定的なる)配列することが出來やうか知れぬが、此れに據りて到底宗教の眞精神に觸れることは六ヶ敷い、否暫く分別知的の遊戯には多少の氣休めとなるかも知られぬが、凡て氣脱けのしたる無生命のものであるとしか受取られぬ、眞の宗教問題とは相去ること正に千由旬である。たとひ後世の人師に據りて種々に案出せられたる教理ありとするも是等は悉く其時代の佛徒に據りて是ぞ眞に佛陀の眞意なりてふ強烈なる内的躍動を経て表明せられたものでないものは一もないと云はねばなりませぬ。故に佛説と云ふことを佛教徒の頭腦より取り去ることは決して軽い問題では無い、實に中心問題であると云つても決して過言ではない。又翻つて思ふに教理發展と云ふことが而かく信賴すべき金科玉條であらうか、是は寧ろ空想であつて、彼の進化論と同じく幾多の矛盾と缺點を包むのであると信ずる。亦復今日より遡りて原始と謂ひ乃至前後に亘りての思想排列が如何程の度合迄確實なりや又可能なりやと考へる時所謂史的發達の確實性可能性及び功力性は如何、想ふに現今佛學者は、餘りに宗教を他の科學と混同して、時代の風潮に追隨迎合して、一の歴史學の如く考へ、斯くて膚淺

なる無内容なる乾物となしつゝあるにあらざる乎。斯くして眞の宗教問題に觸れむとす、誠に木に倚りて魚を求むる類である。と云はねばならぬ。吁、眞實の佛道を迎ふる日の誤まられたる事既に久しきにあらざる乎。吾人は善導、元祖を超へても尙佛敎の眞意に觸れたりとする乎、古への人師の時代と態度と史料をも過ぎても尙確實性を表明し得るとする歟。功力性を人生に與ふべしとする歟、吾人は甚だ疑ひなき能はざるなり、否、寧ろ此を否定せざるを得ないのである。吾人は衷心より佛學者の態度が、史的排列の遊戯より轉じて、傳統相承の宗教生命にまで還らむ日の復興を望みて息まざるのである。

小乗より大乘は發展せしものなるか、小乗とは如何に、大乘とは如何に、吾人は所謂小乗と稱する經典の中に大法の潛むものなることを知る、又所謂大乘の中に常に小乘法の規脈を見る、大乘は所謂小乗より發展せしものなるか。是には一應道理の存するが如きも、此も一の思想排列の豫定法に過ぎざるにあらざる歟。凡そ法に大小無く、人解に大小あるのみにして、表明に大小あるのみなること、恐らく古人の解を以て正當となすべきものたるべし。亦四諦、十二緣、六度を序の如く、聲聞、緣覺、菩薩に配當するは尤も一應の談なるべく、聲緣、善の三者が時代を追ふて發展せりと云ふこと

にも甚だこじ附けのこと多かるべく、亦三世諸佛の御説示が釋尊に無かりしとは斷乎として云ふべからざるべく、佛身佛土に居し、其の眞壽は測るべからずとは洵に佛を見る者の言なるべく、又一切衆生の佛性を信じたまひし佛陀世尊は、現成法界の佛の妙交あらせ玉ひしことは疑ふ餘地のあらざることなりとすべきである。復四十餘年の御説法には淺より深に向はしめ玉へる施設勞苦も固より存したるなるべく、優婆塞、優婆夷、國王、長者、善惡諸人に對せられ、又は平生、危難種々の臨機、臨時の御説示は必ず同一施設、同一方法とも限らざるべきは明かなるべく、又當時隠くれたる菩薩大土か印度に簇出して能く釋尊の正覺に内鑑靈通せられたることも寧ろ明かなる事實なるべく、如是の聞法は茲に施設、表明、利益を異ならしめたるものであらう。而も常に至心歸命釋迦牟尼佛如是我聞の根本動力から顯はれたるものなることを見逃してはならぬ。

斯くて釋尊萬差の教法は其當時を潤すと共に流れて後代に至り、時處機縁を通じて出沒を存したるべし、必ずしも發展にはあらずして、病要に應じて其の教益に力あらしめたるものでなければならぬ。但し其の時機の病要に應ずる時、其の一法こそ最も有利の光を放つものなるに依つて、或る意味に於て前者、他者よりも勝ぐれるも

の即ち發展せるものと云ふことは云ひ得るも、必ず段階を経て發展すべきものとの考へは、唯一の空想的豫想到に過ぎざる事であろう。

さもあらばあれ、我はそも何を求むべきであろう。我はそも何の法に依りて救はるべきであろう。將また時代の要求とは何物であろう、時代の救はるべきこととは何事を意味するであろう。人間本來の慾望をのみ満足せしむることは固より宗教の本務にはあらざるべく、佛教の指示にはあらざるべし、又時代に迎合することのみが固より救濟の法にあらざるべく、追隨そも何の要をかなすと云はねばならぬ。而も又我の眞の要求を離れて、其利其の益なかるべし、時勢に適合せずして、佛力亦如何とも光力を現することは出來難かるべき事と云はねばならぬ。願くは我が眞に求むる聲に醒めしめよ、願くは人の眞に求むる聲に闡かしめよ。惟ふに現代我人共に文化の華に迷ひ、是れ利を求め此れ自己の樂を求む、而して宗教よ來れ、佛教よ來りて此の求願を充せと云ふに至りては、恐らく八万の要法も其の益を施すに難かるべし。其の利や固より輕ずべきにあらず、されど吾人は其の利よりも更に尊きものあることを忘れてはなるまい。

如何に時變り、人異るとするも、求むべき人間、宗教心の本眞に至りては、常に同一な

りとすべきであらう。如何にして生死を出離すべきやとは、法然上人の眞摯なる求道の對度であつた。而して亦法然上人の門を叩ける人々も、決して如何にして利を得候ふべきか、如何にして人生をより能く經營候ふべきぞとは求めなかつた、然して人々は決して法然上人は此の世に無用の人であるとは思はなかつた上人が、幾十年充然として藏經を播き玉へるをも此の世の無用の事であるとは謗らなかつた。是れ全く上人が生死出離の道に煩ふて、偏に是を求め玉ひし態度である。上人が得たと歡び玉ひしも亦全く此の要求を得たと歡び玉ひしのである。亦上人の下に來る人は悉く如何にして此度生死を出離すべく候ふぞと求むる人々のみであつた。釋尊の大覺と云ふのも、又恐らくは此の生死解脫が其の根本要件であつたに違ひがない。吁生死解脫、不生不滅の靈道、無礙解脫の境界、是ぞ人々の最終の要求でなければならぬ。八万の要法も畢竟此の要件に應ずる指導でなければならぬ。此には小乘も大乘も、聖道も淨土も同轍でなければならぬ。法然上人の宣はく、何れも生死解脫の法なりと。宗教家に向つて直ちに利殖の法を教へよ、社會改善の法を説け、然らずむば汝は無用の長物である、社會の穀潰しであると云ふは、説かざるものゝ誤りなるか、求むるものゝ非なるか。吾人は果して生死解脫と云ふことに猛進するは不都

合であるか、人々に此を第一義として示さむとするは不可である乎。吾れ人俱に篤と考へさして頂かねばならぬ。而して生死解脱とは吾人が心中の貪慾、瞋恚、愚痴等の煩ひより、柔げられ、脱がれたる無礙自由の状態でなければならぬ。固より是れより、個人の救済を始め、引きて社會の改善、平和の基ともなるう。乍然、多くの場合所謂人の慾求とか、人生の慾望とかには當に正反對に出るのが佛教の行き方である。唯夫れ求むべきは生死解脱、離るべきは貪瞋痴虚妄の里である。此の問題の前には最早や諸の戲論を許さない。小乗も無く、大乘も無く、聖道も無く、淨土も無い。皆是れ生死解脱の法である。貪怒痴虚妄の火宅を出づる法である。世尊愍ろに宣はく、汝等當に諸の無常の火の世間を燒くことを念じて早く自度を求むべし」と。天親龍樹も然らざるは無く、知者賢首も亦然り、傳教、弘法も又此の轍を逸する能はざるべし。善導和尚亦専ら此を高潮し玉ひ、法然上人愍勸の指示亦是を出で無いのである。分別假智を捨て、無漏の聖智に契合するか、佛願大悲の御手に全分の歸投を捧ぐる乎。戒定を修めて慧門に出づる乎。要は唯生死の解脱であつて、意路不到の妙境解脱界に出づるなくむば、百千の説法は無用であると云はねばならぬ。此を以て此の意を種々に説解し玉ひて、禪の如く、教や指なり、悟や月なりとして、教外を重じ、華嚴の如く

悟境眼前に在り、一事に具すと談じ、天臺の如く三千の妙諦方寸の一念を離れずと云ふ。或は淨土の如く方を西方に示して、佛願力を此土の含識に及ぼす。我等は畢竟何れの法に據るも可なるべく、要は唯生死を解脱するに在り、三垢の冥を拂ふに在るのである。

是を以て法然上人が隆寛律師に御示になつて居る語にも「聖道淨土異りと雖へども其體一なり義意當に知るべし」と仰せられて居る。されば往生淨土の法門も究竟生死解脱に外ならざるべく、還愚托佛の一路も即ち妄境出離の因縁に異らない。此の間に何が故にとか、何の爲めにとか云ふ如き猶豫打算を狭むべき問題ではあるまゝ。此を求むると云ふことが人間至心の要求であり、此に應ずるのが究竟至極の要法でなければならぬ。釋尊宣はく、「我は良醫の病を知りて藥を説くが如し、此を服すると服せざるとは醫の咎にあらざる也。亦能く導く者の人を善導に導くが如し、此を聞きて行かざるは導く者の咎にあらざるなり」と。凡そ法門に就きては至心のもよめなかるべからず。求めなきものゝ前には教法は徒らに戲論の具となるべし。釋尊箭筈經の説のごとく、餘りに樂の由來因縁のみを論じて終に服せずば、後に悔あるべし。法然上人の宣はく。末法の行人、戒定の足萎へたる者は、聖道の嶮路

には臨むべからず、唯淨土の一門のみありて通達すべきの路であると、我が病を省みて早く薬を服すべきである。(十、六、二九)

選擇集の建曆版、建長版及び木活版

藤 堂 祐 範

余は本誌第二號に選擇集の古版本に就て、尠か見聞せし處を開陳せしも、建曆、建長の兩版に就ては、其の當時材料の蒐集完からず、又論文の冗長をも恐れて筆を擱きしも、頃日尠か材料を蒐集し得たるを以て、更に大方の教示を乞ふことゝはなしぬ。

古來本集の出版に就き、元久年間に燒失せられしと云ふ所謂原版を云云する人も、此の原版の出版は疑はしく、元久三年本集の版本版本を燒失せしむべしとの山門よりの申状さへ發見せられず、其の事實さへ疑はるゝ今日、大に有力なる資料の發見せられざる限り、疑問として保留して置くより外なかるべし。

建曆本の出版に就ては、現時其の版本を見ること能はざるも、此の本の出版は疑ふ餘地なきものなるべし、梶尾明惠上人の摧邪輪及び日蓮の立正安國論、又宗内に於て